

真に地域に 必要とされる病院へ。 7つの改革案で 新たな飛躍。

河北都市で唯一の公立一般病院で、急性期病院でもある河北中央病院は、昨年4月に着任した寺崎修一院長のもと、大きく変わり始めている。近隣に大学病院や急性期の拠点病院が控える地域で、いかに存在価値をアピールしていくか。その行方に注目が集まっている。

医療最前線からのレポート
MEDICAL
津幡町国民健康保険直営
FRONTIER
河北中央病院 KAHOKU
Central Hospital

地域に必要とされる病院

人口減少や高齢化が進む地域の自治体病院は、どこも厳しい財政事情に迫られている。金沢市の北部、河北郡津幡町にある河北中央病院も数年前までその一つだった。

病院がある河北都市周辺は、過疎地でも人口減少地でもない。金沢市の中心市街地から車で20〜30分圏内で、どちらかといえばベッドタウンとして人口が増えている地域だ。津幡町は人口約4万人、隣接する内灘町は約2万7,000人、かほく市は約3万4,000人で、二町一市で10万人を超える。その河北都市で唯一の公立一般病院であり、急性期病院として昭和26年の開設から曲がりなりにも60年以上にわたり地域を支えてきた。にもかかわらず、最盛期で80床あった急性期病床は平成26年に20床減って60床となり、そのベッドでさえ一時期、空床が目立った。そればかりではない。周辺には、大学病院はじめ急性期の拠点病院や民間の総合病院などが集中していることから、新患の多くは近くの大学病院、総合病院へ流れる環境下にあった。結果、

患者の多くを高齢者が占めるようになり、慢性的な医師不足、看護師不足も重なって経営的に苦境に追い込まれていく。

このままでは地域のなかで埋没しかねない。そうした状況のなかで、新たなかじ取り役として平成26年4月に着任したのが、寺崎修一・現院長である。寺崎院長は、それまで金沢大学附属病院、前住地の金沢赤十字病院では消化器科部長として、現場経験を多く積んだ専門医である。しかし病院経営に関しては全くの未経験。それもあって、当初は改革の矢面に立つて果たして自分に何ができるだろうと思悩んだ。

しかし考え抜いた末に、自ら導き出したのは「地域にとっていかに必要で大切な病院であるかを、地域の人たちに知ってもらわなければならない」。その考え方を病院理念として新たに打ち出し、病院改革の一步を踏み出していく。

病院理念「Net・Biz・Jon」

「地域に密着した医療を提供し、安心して暮らせるまちづくりに貢献し

ます」それが、全職員と寺崎院長が一緒になって考えた新たな病院理念である。この理念のもと、河北中央病院は病院のロゴを一新、今後の将来像としていくつかのビジョンを掲げた。

いわく「地域の健康長寿社会を実現する」「医療・介護・福祉・保健分野で密接な連携を構築する」「地域の超高齢社会を支える」「質の高い地域医療、安安全心の医療を提供する」「住民から親しまれ、選ばれる病院をめざす」「職員が誇りとやりがいをもつて働ける病院であり続ける」など7項目にわたる。寺崎院長は、そのビジョンを一つひとつ具現化するために、まず全職員に自らの考えと方針を徹底的にプレゼンテーションした。

当時の心境について「重要なことは、理念に掲げた地域に密着した医療、地域に密着した病院として自分たちが何をやるか。その意識を全員が共有しないと、ビジョンの実現は難しい」と、寺崎院長は振り返る。

加えて、地域に密着した医療を推進していくには「ネットワークを密にして地域全体の健康を視野に置いて行動する。地域住民の皆さんと切ってもきれない関係を築き、いつでも手





PROFILE
寺崎 修一 たらさき・しゅういち
 河北中央病院 院長
 日本内科学会総合内科専門医、日本消化器病学会専門医、
 日本肝臓学会専門医、日本消化器内視鏡学会指導医
 昭和62年3月 金沢大学医学部卒
 昭和62年4月 金沢大学第一内科入局
 平成12年4月 金沢大学第一内科 講師
 平成14年4月 金沢赤十字病院 消化器科部長
 平成26年4月 河北中央病院 院長

医療最前線からのレポート
MEDICAL
 津幡町国民健康保険直営
FRONTIER
 河北中央病院 KAHOKU Central Hospital

は、地域の急性期病院としてなくてはならない病院として認めていただけるようになりたいと思っています」
 地域の病院として必要とされる。それは全職員が「ここで働いて良かった」と思える病院づくりにもつながっている。河北中央病院の挑戦は、さらに今、加速しようとしている。

知症へのサポートなど、医療連携だけではなく介護や福祉との広域的なネットワークにつなげていきたい」としている。
 院長着任から1年半余り、河北中央病院の改革はまだ緒にたばかりだが、「改革が始まって4ヶ月目ぐらいから初診患者数、紹介患者数が増え始め、その後も着実に増えてきています。胃カメラの評判をきいて受診される患者さんが増えるようになり、大変嬉しく思っています。初診は広報活動の成果を、紹介患者さんは地域の先生方との信頼関係を反映する鏡だと思いで、これからようやく花が咲くかどうかというところ。あと1〜2年後に

を差し伸べて、電気や水と同じように無くなったら困る存在にならないといけない。そこそが地域に密着した、連携病院のあり方ではないか」と考えたのである。
 河北都市で唯一の公立一般病院、急性期病院として存在価値を發揮していくには、まず自分たちの位置づけ、役割を明確にしなければならぬ。その上で何ができて、何ができないのか。強みと弱みを全職員や地域にはつきりと示し、強みは伸ばし、弱みをいかに克服するかに知恵を絞った。そして時間をかけて意識改革と方針の浸透を図り、地域においては医療関係者の元に寺崎院長自ら積極的に足を運んで理解を深めた。

チーム医療と連携医療が二本柱

その中から生まれたのが、質の高い医療を提供するための「チーム医療」であり、地域との「連携医療」だった。チーム医療の根底にある考え方は「多職種による診療プロジェクトチームであること」と前置きして、寺崎院長が説明する。

「当院は、急性期病院といっても病床数はわずか60床で、常勤医は私を含めて7人しかいません。しかも3人は1年ごとに入れ替わります。当然、診療科や設備も限られています。

そのなかで質の高い医療を担保するには、医師主導という発想ではなく、チームが主体的に動かないと地域に密着した医療は展開していきません。自分たちが得意とする診療領域で、拠点病院や大学病院とそんな医療を提供するには多職種が協力してスキルを磨き、レベルを向上させるしかない。ようやくそれが定着してきた段階です」

具体的には、外来診療を中心に糖尿病重症化予防PT（プロジェクトチーム）はじめ、血管病PT、COPD喘息PT、骨粗しょう症PT、禁煙PTなどが活動中。入院診療においては早期回復、ADL（activities of daily living：日常生活動作）の維持向上、退院支援の面でチーム医療に取り組んでいる。リハビリ医療にも力を入れており、平成27年に作業療法士、理学療法士併せて4名増員して7名となり、今後さらに増員を図る予定だ。

チーム医療と連動して、河北中央病院の新たな強みとして地域への浸透を図っているのが「連携医療」である。チーム医療や河北中央病院の存在価値を高めていくには、地域との協力、連携なくして成立しない。河北都市全体を、河北中央病院と周辺の拠点病院、開業医を含めた医療連携で支えていくという考えだ。寺崎院長が続ける。



夢とやりがいがある病院づくり

今後増えることが予想される地域の高齢者対策にも力を入れており、地域包括ケア病床を設けているのもその一つだ。在宅や施設入所者の体調悪化、入院医療などに備えたもので、河北中央病院では介護・保健分野との連携も積極的に図っていきたいと考えている。

寺崎院長は、公立病院としての公益性をもった医療を提供していくこともビジョンの一つに掲げており「津幡町の胃内視鏡健診に参加し、がんの早期発見や禁煙外来、さらには認

「地域の先生方と、定期的に河北中央医療連携の会を開いて症例検討やミニレクチャー、当院の取り組みなどを行っています。また、開業医さんや地域の拠点病院さんと循環型連携を行うための『一人主治医制』を推進しています。救急医療においては、たとえば地域の高齢者が近隣の病院に入院した場合、検査などのあとすぐ当院に転院できるようにUターン先の病院と提携しています。広域連携の面でも、糖尿病重要化学予防ネットワークで専門医療機関に登録したのをはじめ、肝疾患や脳卒中においても専門医療機関に登録、脳卒中は加賀脳卒中地域連携バスで急性期から回復期、生活期に備えられるようにして